



社会科学と人類学の  
希望についての対話から

玄田有史・宇野重規  
2007.8

本ディスカッションペーパーについて  
許可のない転載・引用等の利用はご遠慮下さい。

**社会科学と人類学の希望についての対話から**

報告：玄田有史氏・宇野重規氏

---

玄田：今回は今年度に入って初めて二人でご報告という形になりました。6月18日（月）19日（火）の二日間にわたって今年度社研で客員教授をお願いしている大阪大学の春日直樹先生、コーネル大学の宮崎広和先生、大阪大学グローバルコミュニケーションセンターの草郷孝好先生、一橋大学の足羽興志子先生という人類学と開発経済学の先生方と社会科学というユニークな組み合わせでワークショップを開催し、個人的にも会全体としても非常に有意義な時間を持つことが出来ました。そこで、その二日間の議論を私と宇野さんでご紹介をさせて頂きながら今後の希望学の構築、方向性についてご意見を頂ければと思っています。では、宇野さんと私と30分ずつご報告を致します。その後、またいつものように皆さんに自由に質疑を頂ければと思いますので、よろしくお願い致します。

それでは宇野さんからお願い致します。

宇野：社研は社会科学の研究所ですので、これまであくまで社会科学の視点から、希望というきわめて扱いにくい問題に取り組んできました。希望という問題は、素材としてはソフトで取り扱いにくく、つかみ所のないものですが、方法論はあくまで社会科学ですから、検証可能な仮説は何か、どうやったらデータが取れるのか、というスタイルでどうしても議論しがちです。しかしながら人類学の人達はそれとは違うスタンスで希望という問題にアプローチしようとしています。人類学といっても非常に幅が広いですから、「これが人類学だ」とはなかなか言えるものではありません。そもそも社会科学と人類学を並べて論じること自体が適切かどうか良く分かりませんが、同じ希望というテーマに関心を持っているとはいえ、両方でスタイルがだいぶ違うなと感じました。今回パートナーとして一緒にやっていただいた春日直樹さんは、この4月に文化庁長官になられた有名な人類学者の青木保さんのお弟子さんで、非常に文化人類学者らしい人類学者です。おかげさまで、私達は非常に知的刺激を受ける事ができました。ただ、このワークショップに参加した社研の皆さんの中には、うまく理解できない部分もあったかもしれません。元々きわめて独特な世界を論じられている上に、我々の頭が社会科学になっているので、ますます理解が難しくなるというわけです。そういうわけで、今日は私なりに人類学の先生方のお話の中で、此処が面白かったというところを確認して、出席できなかった方にも情報提供が出来ればと思います。

1) 文化人類学とは何か、とレジュメではたいそうな事を書いてしまいましたが、文

化人類学が何かなんて一般的な定義は出来ないと思います。ただ、私は政治思想史学者ですが、政治思想史研究をする前に実は先ほど名前の挙がった青木保さんが結構好きでして「人類学っていいな」と思っていた時代があります。若い頃の青木保さんはタイの僧院に行って仏教の僧としての修行をずっと積んでいました。タイですから小乗仏教ですよ。その修行のプロセス、つまり具体的に何をやったか、自分はそのつど何を考えたか、そしてその過程で自分がどう変わっていったかを詳細に記述していったんです。（青木保『タイの僧院にて』）それによって人間の精神に起こる大きな変化とか、言葉で表現できないような体験を描き出そうとするスタイルはなかなかいいなあと、人類学ってなかなか面白いなと思った記憶があります。結局、私は政治思想史というあくまでテキストを相手にする学問の方へ進みましたが、こういう人類学に関心を持った時代があったことを思い出すいい機会になりました。

文化人類学を代表する著作は何か、といわれても多分これもいろいろあると思いますが、レヴィ・ストロース Claude Levi-Strauss の『悲しき熱帯』 *Tristes tropiques* (1955) という非常に有名な著作があります。いわゆる構造主義人類学の元祖になった著作ですが、その翻訳をしたのが日本を代表する文化人類学者のひとりである川田順造です。そこで彼の書いた訳者前書きより引用しますと、これは要するにレヴィ・ストロースの学問的スタイルの説明なのですが、文化人類学一般について述べているとも言えます。ちょっと読み上げてみます。「まず、時間の秩序を無視した、というより敢えて交錯させた重層的な叙述。空間の秩序においても、可視的な対象を一旦分解したあとで、知的に一つの実在を再構成していく叙述。言葉と言葉の破格な結び合せ。言葉の多義性を通じての意味の啓示。ときに、曖昧な語法によって、観念はかえって厚みを帯びて定着する。そして隠喩と換喩のふんだんな使用、隠喩と換喩は、人文科学におけるいわゆる実証主義、経験主義の方法とは対照的なもので、後者の方法によっては明らかにできない次元に隠されていたものを、一挙に発いてみせる力をもっている」もう一ヶ所引用しますと、「文化を、一つの単位をなした総体として経験的・実証的に満遍なく捉えるのではなく、文化の幾つかの兆候の吟味を通して隠された意味を解説してゆこうとする」と書いてあります。「時間の秩序を無視した」というのは、文化人類学というのは歴史学と相性のよくない部分があって、要するに変化というものをあまり説明しないんです。つまり昔々のどこかの神話的な世界と現代社会とに、いきなり同じような精神の構造があるということをバーンと言ってしまうわけです。これは歴史学者にとっては耐えられない話で「おい、いくらなんでも時代背景が違うだろう」と反論するのですが、人類学者はそういう時間の違いを無視してしまうんです。フィジーの調査をしていた宮崎さんが、次に現代日本社会の経済のトレーダーの世界を描こうとしたのが、いい例ですね。歴史学者や、あるいは社会学者だったら、そこまで違うテーマを扱うことは難しいかもしれないんですけど、人類学者ならそこ（トレーダーの世界とフィジー）にある種の似たようなパターンや思考法、構造などを見つけ、そこに「同一のものがある」と言うこともできるわけです。「それをどうやって実証するんだ」と社会科

学者は言いたくなるんですが、「いや立証しなくてもいい、できないんだ」と言うことも可能なわけです。ではどうするかというと、人類学者は代わりに言葉をふんだんに使用する、言葉の多義性を活用するということになります。

隠喩と換喩というのは文芸理論の言葉で、私もいまひとつよく分かりませんが、隠喩というのはいわゆるメタファー **metaphor** というもので、換喩はメトニミー **metonymy** です。どう違うかということ、あるものをそのまま言うのではなく、違うものに例えて表現する方法という意味ではまったく同じですが、辞書を引きますと隠喩というのはあるものを、それと全体的に同じもの、同じレベルのもので例えることで、例えば、王様をライオンで表現する、王様というのは王国のトップ、ライオンは百獣の王、だから王様＝ライオン、これが隠喩です。それに対してあるものを表現する際にその一部分を出すことによって全体を表現する方法、例えば王様を表現する際に王冠があります、王様＝王冠、これが換喩です。こういうものをたくさん使っているいわゆる実証的、あるいは経験主義的な方法では表現できないようなある種の意味、これを示すのが人類学だということを川田順造が書いているわけです。これがどれだけこの間のワークショップでご報告いただいた皆さんにあてはまるのかわかりませんが、とりあえずこういうことを最初に指摘しておきます。

次にご報告順に面白かった点をいくつか指摘していきたいと思いますが、その前に簡単にご紹介をさせていただきます。先ほども申し上げたように、春日直樹さんは青木保さんのお弟子さんで、一番人類学者らしい人類学者だったと思います。次の草郷孝好さん、この方は人類学者というより、むしろ開発経済論の方です。いわゆる経済的な意味での開発、現代よく言う **Human Development Index** (人間開発指数)、さらには人間の幸福という主観的な次元までを対象に入れた形で開発経済学を捉えようとする人です。最後の宮崎広和さんも人類学者らしい人類学者です。先ほども少し触れましたがフィジーのフィールド調査をしていましたが、最近ではトレーダーという経済の最前線で働く人達に密着して、その人達が何を考え何に悩みどのようなことを目指しているのか、ということを書き記述しています。フィジーの人びととトレーダーの間に何の関係があるのかと思うのですが、両者とともに自らの研究対象としてしまうところが人類学だなと思います。最後に足羽與志子さんがコメントをなさいました。足羽さんはスリランカについての人類学的調査をやっていらっしゃいますが、民族紛争の真っ只中に調査に入って、今のスリランカの非常に厳しい政治的軍事的対立状況をリサーチされている方です。

2) 何度も言っていますが春日さんは一番人類学者らしい人類学者です。彼は社研の方法論について直接的に言ったわけではないですが、仮説を提示し立証する、ある種のモデルを通じて学問を議論する、というスタイルに最初に違和感を表明されました。彼が人類学でやっているのは構造とかシステムといったものでは表現できないような、モデル化できないような個別的な現象、構造やシステムとしてモデル化したらそこから落ちてしまう、あるいはその外にあるような個別的な現象を記述していくことであり、それが学問的価値だと思っています。少なくともそれが彼の学問の価値だと言っています。

「みたて」「フィクション」「比喩としての希望」、いったい何のことだろうと思われると思いますが、これらがその後の議論のキーワードになっていきました。実際私もうまく説明できる自信がないのですが、これらは「as if かのよう」 というもので、as if としての希望、これは曰くい難い気もしますが、つまり希望というものを実体化して「これが希望だ」という議論をするのではなく、希望というのは実体のあるものではなく、ただ希望というものをあたかも有るかのごとく論ずることによって、何かが見えてくる、そういうものではないか、と言うんです。こう言われてもますます意味がよく分からないと思われるかもしれませんが、彼は「かのよりの哲学 Die Philosophie des Als Ob」の話をされていました。「かのよりの哲学」というのは有名なドイツのファイフィンガー Hans Vaihinger という哲学者の議論です。Als Ob というやつですね。as if と同じ意味です。それは何かというと、人間的な営みの世界を読み解こうとしたときに、肝心なのは真理ではないということです。真理ではなくて真理かのように見えるもの。それが真理かどうか、実証可能かどうか、経験的に証明できるかどうかわからないもの。人間の知の世界というのは、大半はそういうものだというわけです。虚構というのは実在するものではありませんが、無意味かということそんなことはありません。人間の世界というのは大半がフィクションで出来上がっているからです。だからフィクションとしての人間の知的な営みの世界を読み解いていくのが哲学なのです。起源をたどればカント Immanuel Kant ですね。カントという哲学者は自由とか、魂とか、不死という理念について論じました。カント曰く、人間の自由というのは実はない、人間というのは実は環境やら何やらで全て決定されている。にもかかわらず人間は自由という理念をどうしても持ってしまおうし、現に大切にしている。しかし自由なんて本当は実在しない。では自由は無意味な理念だろうか。いや自由は本当に客観的に存在する訳ではないけれど、自由という理念を持って世の中を考えていくことによって何か生まれてくる。カントはこれを、現実を構成する理念ではないけれども、現実をあたかもかのように見るとこう見えてくるという意味で、統制的な理念と表現しました。魂も不死もこういったものはある意味でいうと無意味だし実在するものではない、けれども我々はそういった理念なしにはこの世の中を理解することができない、というわけです。レジュメの2)の部分の最後の矢印以下は春日さんの言葉ですが、「希望の研究対象は、希望という比喩によって<まだ一ない>を掘り起こす」ことである、と繋げています。この<まだ一ない>はブロッホの言葉ですが、今の段階では見えていない、しかし現実の中には何らかのその種が蒔かれているようなもの、後になってみないとわからない<まだ一ない>ものを、「希望」という比喩を使って見ていく、これが希望学の研究対象ではないかと春日さんは言っていました。

3) 次は草郷さんですが、草郷さんは開発経済学がご専門であると同時にNGO、NPOの実際の活動もされている方です。大変実践的で、この報告の直前にもブータンに行ってきたそうです。彼の報告の中で非常に面白いのは、要するにもととの開発経済学というのは、いわゆる途上国と呼ばれる国々の経済的な発展を第一の課題としていました(最

初はGDPが基準だったということです)、第二に **Human Development Index** (人間開発指数) HDI というどれだけ人間らしい生活がそこでなされているか、つまり経済的發展では測れない意味での、人間が周囲の他者との関係において、どれだけ安心して且つ満たされて生きているか、ということを目指ししようという議論に移りました。HDI というのはGDPに比べるとはるかにソフトなものを対象にしていますが、あくまで数値化できるものです。現代ではさらに次の段階として幸福感や満足感を対象としているそうです。彼の関心は、いわゆるGDPの高い国でHDIが高いとは限らないし、ましてそこに住んでいる人間が必ずしも幸福感や満足感を持っているわけではない、ということにあります。つまり、GDP、HDIのような客観的な評価と、そこに暮らす人たちが実際に自分が幸福かどうかについてどう思っているか、という主観的な評価の上にはずれがあるというのです。従って、かつての仮説は物質的豊かさをとりあえず実現すれば、それによって生活への満足度や幸福感は高まるであろう、という前提のもとですべての議論をしていましたが、この間の因果関係は実はよくわからないということになります。今経済学では、幸福とか主観的な意味での健康とか、生活の質というものを研究対象として扱う方もずいぶん増えているそうです。

草郷さんのお話で非常に面白いと思ったのは、先ほどの客観的な評価と主観的な評価のずれという話のいい例として、日本の場合をあげ、一人当たりのGDPの伸びと生活への満足度が1980年代中葉からみごとに乖離して、GDPは伸びているのに満足度はどんどん下がっている、とおっしゃった点です。日本社会というのはどんどんこの二つがずれていく社会として描かれているのに対して、ブータンという国はいわゆる経済的な意味での発展に関しては確かに遅れていますが、主観的な満足度が高い社会として対比して描かれました。草郷さんは論点としておもしろいことをいくつか指摘されていましたが、ひとつにはどの視点から希望を論じるのか、ということです。これは我々もずっと議論してきたテーマですが、希望という場合に一人一人に希望があるのかどうか、それともある社会が希望のある社会なのかどうか、ということです。視点をどこに設定するかによって問題は違ってくるわけですが、これは我々と非常に近い問題意識です。二番目に、希望は測れるのかどうか、分析できるのかどうか、ということです。先ほどのGDP、HDIでは測れないような幸福について、現在の経済学はこの幸福というものすら経済学的方法論で捉えようとしています、本当にできることなのかどうかを最後に指摘していました。

4) 次に宮崎さんのご報告ですが、彼は先ほどもご紹介したようにフィジーで調査をする一方でトレーダーの分析も行うというように、非常に活発にフィールド調査を行っています。他方で、今回のワークショップのご報告者の中でも一番理論的で、一番抽象度が高かった人だと思います。彼の問題意識がよくわかったなと思ったことは、彼のフィジー調査にしても理論的な大前提があるということです。それは何かというと、ソビエト連邦崩壊後に社会理論一般が危機の時代に陥ったということであり、彼はこれを非常に強く意識しています。別にソ連が崩壊しても社会理論は全然困らないという人は当然いると思

ますが、ソ連って何だったのと言えば、彼によれば現在の資本主義的な、あるいは自由民主主義的な政治経済体制に対するオルタナティブだったわけです。実際それが仮に非常に悲惨な状況に陥ったとしても、現在の体制とは違う社会体制がありうるというオルタナティブを象徴するものであったんだと。そうだとすれば、今やそういうオルタナティブはなくなってしまったんわけです。現実の社会に対して、それを理解しようとしたり、評価したりする際にそれとは違う社会、つまり19世紀以降の社会科学がいつもそうであったように、現状を批判するには現状とは違う社会になりうるという、オルタナティブとなる社会の理論が必要であり、それがあったからこそ現実の社会に対して批判的な視点で見たり、評価をすることができたのだと言うわけです。今の我々の時代はそういうオルタナティブが消えてしまった時代であり、そういう時代に社会理論を展開することは非常に困難であるわけです。ポスト社会主義、ポストユートピア、つまり今やユートピアというものすらすでに構想できなくなってしまう時代なのです。少なくとも有力なユートピアが今、目の前にはまったくないというこの時代に社会理論を作るとはいったいどういうことなのか。現代の新自由主義の時代というのは、こういうオルタナティブの社会構想なしに社会理論を構築するという時代であると言えます。つまり、いわゆる新自由主義というのは、あるべき社会の理想というよりは、基本的にはすべては個人の選択であり、それを市場によって調整、統制し、それによって出来上がってくる社会というあり方です。理想社会というものを論じないものとしての新自由主義の時代において、あえて逆説的に希望を語る意味も有るのではないかと宮崎さんは指摘されていました。

次に宮崎さんは希望と「謙虚さ」(humility) について話をしました。知的な意味での謙虚さというのは実は非常に希望に結びついているのだと言っています。大変面白いけれど、ちょっと難しい議論です。宮崎さんによれば、希望というのは楽観主義 optimism や自信 confidence とは対比されるべきものであるというんですね。Hope without Optimism つまり希望と言うのは世の中を楽観的にみることだと常に我々は思っていて、自信満々で「俺はやっていけるぜ」というのが希望の意味だと思っているかもしれないけれど、現代において希望があるということとそれは違うことであって、むしろ楽観主義や自信ではなくて懐疑とか人間の知識には限界があるのではないかとか疑う謙虚さと親近性があるのではないかといっています。思想的傾向をたどるとやはりカントですね、カントというのは非常に理性主義的な知識人のようなイメージがありますが、彼が説いたのは人間の理性には限界があるのではないかと、ということでした。人間の理性は、一体どこで自分自身の限界を定めることができるのだろうか、ということに非常に関心を持った哲学者です。要するに理性が自分の限界を知ること、信仰などによって外在的に理性の限界を定められるのではなく、理性が自分で自分の限界を見定めること、これが哲学の努めだというのがカントの問題意識だったわけです。これはスピノザともつながる議論です。でもそれが何故希望と結びついているのでしょうか。それは必ずしも宮崎さんも明言されていないのですが、人間の知識の限界、人間ができないことを知る事、それが希望を生み出すのではないかと

いうメッセージがこめられていたのだと思います。

ちなみにレジユメの cf.の発言（将来の見えやすさ・見えにくさ 機械論的に未来をある・ないと語れるか）はIさんのもので、ワークショップに出席されて、山田昌弘さんの『希望格差社会』に対する違和感を表明されていました。何かというと、ある人は希望があり、ある人は希望がない、という格差がはっきりあると山田さんは論じているが、そもそも人に希望があるとかないとかいうのはそんなにパキッとと言えるようなことなのか、希望があるとかないとか、将来が見えるとか見えないとかそんなことは言えるのか、というような違和感をIさんはおっしゃっていて、直接今のこの話とは関係はありませんが私の頭の中では結びついていたのでちょっと触れました。

希望とは将来がよく見える事とは違うのではないか、これはなかなか深い問題ですがまだ自分の頭の中でうまく整理できていません。ですからここでは指摘するに留めます。宮崎さんは最終的に希望を研究するという事は、「まだ知ることのできない生のかたち」にコミットすることであると言っています。これも曰く言いがたいですけど、まだ知ることのできない違うかたちの生の在り方があるはずだ、それに我々は分かっていないにもかかわらずコミットするんだ、これが希望を学ぶ事の意味だそうです。

そこからまた不思議なんですけど、宮崎さんは玄田さんを研究したいそうで、玄田研究が次の自分の研究課題だとおもしろい事を言っていました。なんでも玄田さんというのは非常に象徴的なんだそうです。いきなりバーンと「希望学だ、希望はこれから大切だ」と言ったかと思うと次の瞬間、「といってもたいした事ないんですけどね」「希望なんていったってそんなものあてにならないし・・・ははは」という感じで、これは村上龍もそうだというんですね。彼も一方で希望の話をバーンと言っておきながら途中から「いや、希望なんて論じたってしょうがないんだ」とあえていつてみせる、この語り方にどこか共通性があるのだそうです。私は深読みだと思いますが（笑）、彼に言わせると現代に生きる社会理論のひとつの可能性なんだそうです。何故かという、つまり規範主義的にこうだ、こうあるべきだとバーンというのではなくて内省的で、自分が問題設定をしたら、その次の瞬間に自分の問題設定に対して果たしてそれがそもそも意味があったのかどうかを内省していくというんですね。内省的逡巡、悩みながら進む、これが彼に言わせると今後の社会理論のひとつのモデルであり、玄田さんは社会理論の最先端を歩んでいるんだそうです。褒めすぎのような気もしますが（笑）・・・。玄田さんはこのワークショップを通じて「つるんとしていない」というのをキーワードにしていました。つるんとしているのはだめなんだそうです。非常に見えやすいきれいな概念を出して、きれいな結果を出す、つるんとした議論は嘘くさいということを盛んに言っていました。宮崎さんに言わせるとそれはまさしく自分のいっている内省的逡巡と同じなんだそうです。本当に同じかどうか後で玄田さんに聞きたいと思いますが。

その後彼はアービトラージという話をされました。これは先ほどのトレーダーの分析から出てきたキーワードだそうです。これについては、私は本当によくわからないので、

他の方に是非お伺いしたいです。現代のトレーダーの人たちの思考法というのを見ると、彼らは投機的ではないというんですね、リスクを犯して利益を得るという投機のモデルでものを考えていない、むしろアービトラージでものを考えているというんです。「アービトラージって何ですか」と聞いたら、裁定と訳すんだそうです。宮崎さんが言うには、「裁定とは、かけをしない、投機の反対、差異の機会を減らしていく事」だそうです。何かで調べたらこんな事が書いてありました。「証券投資論では、複数の証券を組み合わせて、追加の資金投入なしでリスクのないポートフォリオ（裁定ポートフォリオ）を組むこと。裁定価格理論（APT）では裁定ポートフォリオの期待収益率がゼロである状態を「裁定機会がない」(arbitrage free) とよび、証券価格は裁定機会がなくなるように均衡すると考える」。読んでいて何を言っているのか私もわかりません（笑）。是非どなたかに教わりたいと思うんですが、投機からアービトラージへ、というのが宮崎さんの現在の最大の理論的課題だそうです。これも後で玄田さん教えてください。

5) 最後に足羽さんがコメントをされていましたが、これがとてもおもしろかったですね。とても鋭いことをビシバシという方でした。いろいろおもしろい事を言ってくれましたが、まず希望というものにアプローチするには二つの方法があるのではないかというんですね。ひとつは、希望というのは要するに方法論で、さきほどの「かのように」ではないですけど、希望というものが実体として測れるものとしてバーンとあるわけではないけれど、希望ということの問題設定する事によって、初めて見えてくる何かがある、そういう意味で方法論としての希望だそうです。もうひとつは、玄田さんが今回のワークショップのサブタイトルにしていた「此処にも希望がある」をひとつのキーワードにしたいということでした。このサブタイトルは今回のワークショップではあまり発展しなかったんですが足羽さんの言い方では、様々な現象の中に現存する形として「こんなところにも希望がある」というんですね。そういう形で希望の問題にアプローチしていくこともできるんじゃないか、とおっしゃっていました。特に後者の「こんなところ」というのは、一見すると希望なんかあると全く思えないところに何かある種類の希望があるという話で、彼女自身のフィールドリサーチとの関連でお話されていて非常に説得力がありました。

彼女は、一方でスリランカの宗教が絡んだ民族紛争をフィールドの対象にしていますが、他方ではお能とかお茶が趣味なんだそうです。全然合わないなと一見思いますが、それがそうでもないという話をしていくんですね。お能とかお茶というのはまさに先ほどの「as if」「かのように」じゃないですけど見立ての世界であるわけです。それで、お茶の話ですが、お茶というのは千利休が完成させましたが、これに好んで参加したのは戦国武将達でした。戦国武将というのは明日戦場で首をはねられて死んでしまうかもしれない、本当にぎりぎりの希望のないところで生きている人間です。あのお茶というのは完全に「みたて」の世界ですよ、狭い部屋で一見形の悪い器でお茶を飲んで、それを通じて親密なコミュニケーションをはかっている、明日死んでしまうんだったら、全く希望のない世界に生きている人間が「みたて」だらけの世界で親密なコミュニケーションをはかって何の

意味がある、と思うんですがまさにそういう戦国武将だからこそ、あのお茶の世界にその意味を見出したんですね。全く希望がないように見えるようなところにある、「みたて」というものを通じて得られるある種のコミュニケーションの可能性、これが彼女にとって希望の問題を論じる時に注目すべきものなんじゃないかということです。

それから彼女は能が好きだとおっしゃっていましたが、能というのは独特の時間の流れを表現していて、極めて洗練された表象によって時間を表現している世界です。能というのは常に死者がまず登場します。死んでいる人を登場させて、「死者」から「宗教者」、そして「観客」へと、今ある時間の流れを変えて、言い換えると時間の流れをゆがめる事によってある種のメッセージを伝えていくのだそうです。さらに彼女が非常に強調していたのは、「繰り返し過去の中に未来を読み込む」ということで、これもなんともいいがたい言葉ですが、春日さんが指摘されていたことにも通じる話です。

春日さんはオセアニアというのは三次元の風景の中に四次元が書きこまれていると言うんですね、これまた抽象的な表現ですが、三次元というのは我々の知っている立体的な空間ですが、この中に四次元が書き込まれているというんです。要するに四次元というのは時間の次元を加えることです。たて・よこ・高さの三次元の空間の中に時間という次元を組み込んでいます。今あるこの空間の中に例えば過去を見出す、そういう時間感覚をリアルに生きているのがオセアニアの人々だと春日さんが言っていました。要するに我々の見ている現実について、「現実？見えてるよ」というんですが、我々が現実を見て「見えている、分かっている」というのは、実はそこに時間の契機を読み込んでいるんですね。具体的に言うと、例えばお仕事をされている人だとよく分かると思うんですが、未来に何か実現したいプロジェクトを持っている、でもそれは今の段階ではどれだけ意味があるか分からない、つまりあたかも将来において何かの意味を持つかも知れないプロジェクトとこのを読み込んで今の現実を見ている、ということです。今の段階ではまだないけれど、将来になって初めて意味が分かってくるもの、これを現在の中に読み込む事によってまさに今現在この瞬間に生成しているものを人間は理解しているのである、ということを春日さんもご報告されていたし、足羽さんも非常に強調されていました。今のこの空間の中に希望というものを読み込むことによって何か見えてくる、という基本的な話のラインに繋がるのではないのでしょうか。以上です。

玄田：ありがとうございました。冒頭で宇野さんがおっしゃったように非常に濃密な二日間である一方で不思議な二日間でもありました。捉えどころのなさも含めて当時の議論の流れをライブ感覚で宇野さんがご報告して下さいました。続いて私の話にお付き合い頂いて、人類学と社会科学との対話についてすこし考えるきっかけをお示しできればと思います。よろしく願いいたします。私は全体の流れをうまくサーベイするという事は出来ませんし、どちらかというとな個人的にその二日間の思いをお話させていただこうと思います。

テーマがまったく同じで日付だけが違う二つのメモを準備させていただきました。私は今回の人類学または開発経済学の方々とお話をするという機会の中で、自分の中でひとつだけ目論んでいたことがありまして、それに対する手触りが得られればと思って会議に臨みました。実は6月の希望学セミナーでの仁田さんのご報告にずいぶんいろいろなヒントをいただきました。それは「＜希望がない＞ということ」というチャーミングなタイトルのご報告でしたが、＜希望がない＞とはどういうことなのかを改めて考えるきっかけになったのです。＜希望がある＞という議論の立て方とは反対に＜希望がない＞とはどういうことかということで、6月19日付けのメモにはこういうことを書きました。「希望とは「将来の実現に向けた願望」であると同時に、「将来についての具体的な展望」であり、そこに「一定の実現可能の見込みを伴う」ことで個人の現在の幸福感に少なからず影響を与える、将来に対する期待の形成状況。」こういうものを希望学の中では「希望」としてあえて定義に近いことをすれば、こういう三つの要素を伴うものを考えてきたような思いが少なくとも私にはあります。ただ、改めてこの文章を見ると「展望」とか「見込み」という言葉に対して今まではないような本当に強い思いを自分の中で感じるようになりました。それについてのお話をすこしだけ後でしたいと思います。

こういう抽象的な希望の定義の中で、社会ではなくて個人にとって＜希望がない＞というのはどういうことなんだろうか、その中には少なくとも三つのルーツがあるのではないかと、先ほど仮説を立てて考えるというのは、社会科学の（いい面か悪い面かわかりませんが）特徴だというお話がありましたけれど、三つのルーツという仮説めいたといえますか、予測めいたことを自分の中で考えていました。ひとは、どういうときに＜希望がない＞という状況となるのでしょうか。

第1のルーツは「豊かさが無い」ということです。今まで、希望学のセミナーやいろいろな会でお話をしてきましたが、希望学の中で行ってきた調査、また釜石でのフィールドワークを含めてどういう人が＜希望がない＞と考えるかということ、ある意味では非常に単純といえますか、わかりやすく、「お金がない」ということでした。何かを買いたいと思うけれどそれを買うお金がない、つまり「所得がない」人が＜希望がない＞発言に繋がる人が多い、これはよくわかります。さらに所得の根源である「仕事がない」、所得であると同時に自分の自己実現のためのツールとしての仕事がない人も＜希望がない＞と発言することがとても多いです。もうひとつ、「健康がない」つまり健康状態が悪い、健康が損なわれているという面についても＜希望がない＞と答える傾向が統計でも有意に見られます。所得・仕事・健康の欠如に共通するものは何かといえば、あえて言えば「所有するものに価値が伴っていない」ということです。所有価値が乏しい場合に＜希望がない＞という言葉が発するケースがあって、それは豊かではない、現在の貧困問題、時には格差問題と語られる問題が一方で希望の議論の底流をなしているのだと思います。やはり「豊かさが無い」ことが＜希望がない＞ことなんだ、希望の問題なんていうのは結局豊かさの問題なんだと言う意見もあり得るのだと思います。特に失われた十年で所得が減少し、失業者が増

え、時にはメンタルにうつ病も広がり、健康も損なわせていることが豊かさを失わせ、〈希望がない〉と言い尽くせるんだと答えたかもしれません。少なからずそういう豊かさの問題と関係しているだろうということは、既存の経済学でも予想できることでしょう。

次に第2のルートです。〈希望がない〉という人にはどういう特徴があるかということと人間関係に関して何がしかの欠如感があります。中公新書ラクレでもたしか永井さんの章で書かれていましたが、友達がいない、友達が少ないという人は〈希望がない〉と答える傾向が出ています。釜石調査でも再三お話しした八幡登志男さんという「山華」というミネラルウォーターの会社の社長さんが「三人わかってくれる人がいれば必ず大丈夫、乗り越えられる」とおっしゃっているように、人間関係、社会関係が希望の形成には非常に重要である、それは他者だけではなく、家族というのも人間関係の重要なツールであって家族からの期待を感じて育たなかった人は将来に対して希望を持ちにくいという結果が出ています。こういう社会的な関係、ソーシャル・ネットワーク、ときには社会学のウィークタイズという言葉で表されるような人と人との繋がりにこそ、希望というものが有るのかもしれませんが。逆に言えば〈希望がない〉という人は人間関係、社会的な関係が欠如していて時には社会的な排除を受けている人のことかもしれないのです。こういうものが人と人との関係が大きく変わりつつある現在の社会の中で〈希望がない〉という発言をする人が増えてくるルーツだろうと思います。

希望の問題には、少なくともこの二つのルートがあるのではないかということ、この二年間希望学をやりながら感じてきました。既存の社会科学の中だけで希望の問題を語ろうとするとしたら、多分この二つで希望については説明できると断定することもできたかもしれません。

ただ、おそらくこの希望学で議論する中で、それだけではないのではないか、この二つ「豊かさ」と「人間関係」も重要なルートであるけれど、もうひとつくらい、(全部で三つと断言できるわけではないけれど)何か社会科学の中で捉えられるべき、ないしは希望の問題を考えると対象とすべき重要なルートがあるのではないか、と先ほどお話しした仁田さんのセミナーで強く感じました。それまでは自分の捉えどころのなさの原因が自分でもわからなかったんですが、個人にとって〈希望がない〉ことのルーツは多分もうひとつくらいあるだろう、それが何かを知りたいというのが、今回の人類学との対話の中で、私自身が個人的に密かに思っていたことでした。

ではその第三のルートの可能性として、これまでどういうものに自分の中で刺激を受け感じてきたかということ、ひとつにはA「挫折がない(失敗がない、時間がない)」、というものでした。挫折経験がある人は希望が持ちやすいというのは一体どういうことなのだろうか、それは失敗が許容されないとか、挫折をするための時間的な枠組みがないというようなことと関係しているのだと思います。二つ目のB「ビジョンがない(価値観、方向性がない)」は先ほどの仁田さんの報告の中に出てきた言葉で、向かうべき方向性や価値観がないということで、釜石の中間報告会でも釜石における問題は共有するものがまだまだ

繋がっていないという言葉が出てきましたが、ビジョンとか挫折もすごく大きいかなと思ったわけです。三番目にCと書いたのは、ふざけた言い方だとお叱りを受けるかもしれませんが、「おもしろさがない（つまらない、ワクワクがない、遊びがない）」ということが実は<希望がない>ということの裏返しの言葉なのではないかと感じています。

メモの続きに「Aについて：挫折や失敗が本当の意味で許容されにくい社会であることが希望の喪失感に」「Bについて：個人が希望を有する社会は望ましいが、希望を要請する社会は望ましくない」「Cについて：ある会社の2つの転職理由「面白い」は純粋に個人の問題といえるのか」と書きました。Bについては広渡さんや宇野さんの勉強会で感じたことですが、希望学の多くのメンバーの中には、「希望が持てる社会に」というフレーズに対してネガティブな反応が非常に強くて、忌避感みたいなものがどうやら強くあるようです。ただその一方で、「個人」が希望を持てるための社会環境作りに関しては、比較的多くが肯定的なのです。一体、社会における希望と個人の希望との分断はどこにあるのでしょうか。これが希望を考えるための三つ目のルートのヒントかなと思ったわけです。

Cについて「おもしろさがない」ということですが、これは以前に自分自身が行ったある事例研究の中で思いついたことです。ある有名な会社の人事関係の方にお話を伺ったのですが、「うちの会社ではいい人がやめていく、その原因を突き止めなくてはいけない」というので、いろいろ考えた挙句、辞めた方に「何故あなたはこの会社を辞めたんですか」とインタビューしたそうです。その結果、辞めた方にはそれぞれ個別に事情があることもわかったんですが、あえて二つに分けるとすれば理由は結局二つしかなかったそうです。ひとつは「この会社に勤めていても先がまったく見えないから辞めました」という答えで、もうひとつは「この会社に勤めていたら先が見えちゃったので辞めました」というものだったそうです。このあたりの話はすごく希望の問題と関係しているのではないかと漠然と思っていたわけです。以上のABCが妥当かどうかわかりませんが、こういうことを踏まえながら6月18日19日のワークショップに臨みました。

あっという間の二日間でしたが、そこで感じたことが7月3日付けのメモになります。このワークショップで自分自身が面白かった、この面白さは一体何だろうと考えたときに印象に残った言葉がいくつかフレーズとしてありました。ほとんどは、先ほどの宇野さんのご報告の中で指摘されていたと思います。これも仁田さんが（ワークショップのなかで）おっしゃったんですが、「希望とは、想像力（イマジネーション）の問題かもしれない」という発言がありました。希望学の中でイマジネーションとか想像力という言葉が出てきたのは初めてだったものですから、不思議な感覚を覚えました。また、そのとき会場にいた人たちが、何かについてある部分は、明確にできないけれど共有する部分があるんじゃないかと考えたのはこの想像力、イマジネーションというものでした。

先ほどの、この先が見えないから、逆に見えちゃったから会社を辞めるという話ですが、まったく先が見えないような制度を作っている会社が悪いのかもしれませんが、あるいは先が見えちゃう仕組みしか作っていない会社が悪いのかもしれませんが、しかし、「見えて

しまった」も「まったく見えない」も根本にさかのぼれば、その人自身の見込み、そして展望、その背景になる想像力の形成に関しての何がしかの社会的な意味づけがあるのかもしれないと思いました。その想像力の問題の中で出てきた言葉の中で、私自身が印象的だったのは「半信半疑」という言葉です。これは宮崎さんのご報告の中の言葉で、彼は資本主義の本質のひとつはこの「半信半疑」であると言っています。それは「両義的」であること、「不確定」で「曖昧」であることというキーワードにもつながっていきます。

先ほど宇野さんからアービトラージ、裁定という話が出ましたが、我々経済学部で勉強した者はこの言葉を最初に金融論の授業の中で学びました。例えば二つまったく同じペットボトルがあって、一方が90円、もう一方が100円で売られていたら、90円で仕入れて100円で売ればまったくノーリスクで10円儲かります。まったく同じものに違う価値があれば、つまりそこに「差異」があれば、安い方で手に入れて、高い方で売れば儲かる、濡れ手に粟ですね。ただこれは永遠には絶対続かないんです。何故ならこれが90円で買えるならみんなが90円で買ってしまうから、安いほうはどんどん値上がりをしていって、100円に近づいてしまって、あっという間に差がなくなってしまうからです。

「差異の消失が生まれる」つまり、これは岩井克人先生が『ベニスの商人の資本論』で強調されたことで（恐らく宮崎さんのこの投機の部分の話のヒントのひとつは岩井先生のこの本だと思いますが）、差異があつて、差異をなくすために投機が起こっていくという、差異から想像し、差異を消失するというのを、彼は「終わり」への志向という言葉で表現していました。

また希望の話の中でだんだん「死」の話が出てきて、死と希望の関係をどこかでやはり一度議論する必要があるということをおっしゃっていました。その辺の話が関係しているのかもしれませんが、想像力というのは非常に曖昧模糊としたもの、両義的なもの、また、時には信じるということと、疑うということが同時的に発生するようなもの、それを許容することで初めて想像力みたいなものがあるのかもしれない、ということを感じました。それは物的な手触りというより、何か「匂い」のようなものとの関係かなと「ハピネス」も含めて思ったわけであります。

7月3日付けメモの2番目「希望について、画一的な定義は、すべからず誤りなののかもしれない」というのはどなたかの発言ではなくて、自分の中でずっと思っていたことですが、希望学の中でずっといまだに言われていることは希望の定義をどうするか、ということですが。人類学との対話の中で得られたひとつの結論めいたことは、希望の定義なんかしたってしょうがない、そんなものすればするほど逃げ出していくのが希望なんじゃないか、ということがこの希望学ワークショップの中での議論だったと思います。それが先ほどの「みため」というものの大切さについての私の理解です。希望というのは、結局“not yet”であり、“as if”としてしか表現できないものではないか、むしろそれだからこそ希望というものが、個人にとって時に大きな意味を持つのではないか、常に希望に対して定義すればその構造が逃げていくところに希望の問題というのはあつて、構造としては捉えられな

いんだと強調されていました。それが「主題化」とか「非主題化」、「潜在性」とか「懐疑の問題」という言葉で表されています。

メモの3番目にある「遮断する装置としての希望」は、午後のディスカッションの中で出てきた言葉で、これも私はとてもおもしろいと思いました。希望というのは将来何か形作るもの、将来作り上げていくもの、プロデュースするもの、された結果が希望だ、というようなことをどこかで暗黙のうちに思っていたところが自分の中にはありましたが、そうではなくて希望というのはもしかしたら何かを分断する為の、遮断する為の装置なのではないか、という話が出てきて、とてもおもしろいと思いました。分断とか遮断という言葉は足羽さんのコメントからみんなで議論していた時に出てきました。先ほどの宮崎さんですが、もともとずっとなさっていたフィジーのフィールドワークで PhD 論文を書かれています、その中でフィジーでどんどん開発が進む中でみんながどうやって希望を持って生きているかという話が出てきます。結局希望にまつわるいろいろな慣習行事で何をしているかという、宮崎さんいわく「日常を切るためにそれらがある」のだそうです。やはりいろいろ楽しい事もある一方で苦しい事もある、そういう日常を遮断するための方策がいろいろな希望に関する慣習や儀式なんだそうです。

もしかしたら挫折がある人が希望を持ちやすいというのは挫折を経験してそこからいろいろなものを学んで、想像力を発揮して希望につながるというルートもあるのかもしれませんが、一方で、挫折が希望と繋がるのはそんな単純なルートだけじゃなくて、挫折を分断するために希望を持つというルートもあるのかもしれませんが。そういう何かを「切る」ということの意味が実は今問われていて、それはもしかしたら前々回のセミナーで宇野さんが発表された〈待つ〉ということとも関係しているのかもしれませんが。

今までの私自身の研究の中で出てきた今のニートとか、しんどい状態にある若者たちにある種共通する、全部とはいいませんが、かなり共通するのは、「思い切れない」若者がとてもたくさんいるということです。「思い」を「切る」ことができない、引きこもりの人でいえば生きる意味についてずっと考え続けていて、それを「切る」ことができないのです。ある人にこんな例を聞いた事があります、「じゃあ引きこもりの人はどうやって引きこもりをやめたんですか」というときに、実は阪神淡路大震災の時とか、親の死をきっかけにしてやめたという事例があったらしく、「外的分断」をどこかで待っているところがあるそうです。それがなかなか訪れないと、自分自身で思いを切ることが出来ないという話でした。同じように引きこもりや不登校などを何十年も支援している人に「思い切りの意味って知っていますか」と私自身聞かれたことがあって、「思い切りっていうのは、思いを切ることです。今の若い人たちは思いを切るのが苦手です」といわれました。そういう分断や遮断する内的な装置、またその内的な装置を機能させる為の外的な環境みたいなもの、それがもしかしたら持てないということ、分断ももしかしたら想像力のひとつなので、何かをカットするわけではないのですが、内的なイメージーションの中で何か分断するための仕掛け作りみたいなものがないとすればそこには何か希望の問題と繋がっているも

のがあるかもしれません。

そしてこれは佐藤岩夫さんが午後のセッションのなかで、法律と言うのは「過去を精算する仕組み、」清算して新たな一步を踏み出す為の仕組みである、そこに希望という言葉当てはめるならば何か自分でも語るものがあるかもしれないといった趣旨のことをおっしゃっていたように記憶しています。そこでは過去とか日常を清算するという意味で希望という言葉が使われました。そういうことを考えていくと、何故個人にとっての希望と社会にとっての希望を深く区別しなくてはいけないのかということの一つのヒントが見えてきます。すなわち社会というのは時間も含めて連続的なものなので、そこで「切る」というのは果たしてどういう意味を持っているのでしょうか。しかし個人にとってはやはり分断するとか精算するという装置がなければ現在や将来を生きずらい、だからそういう装置がもてないときに人は希望を持ってないというのかもしれない、もしかしたらこれから何を切る、切断するというのは切るということ自体が、同時に何かを作り上げているのかもしれない、そういう意味での両義的なことも含めてこういう希望と時に個人にとって分断のための社会的な装置というのはとてもいいヒントだと思いました。

そして、同時にこういうことを社会科学として調査するとしたら一体どういう質問項目がありうるんだろうかと考えて、皆目検討もつかないと思った事も率直に申し上げたいと思います。

それからもうひとつ思ったのは希望学というのは新しい学問ですね、といわれながら実はそんなことはなくて、希望についていろいろな議論があるんだという事を改めて知りました。私の勉強不足で、宇野さんのさきほどのお話のスピノザやカント、キング牧師の話も **I have a dream** だけではなくて、実は希望について様々な議論があったんですね。エンデの話を読んだのはたしか広渡さんでしたでしょうか、希望というのはファンタジーの問題と関係していて、ミヒヤエル・エンデの本を読むと希望についての話があるそうです。我々はやはり社会科学の中で、人類学とのいろいろな研究のストリームの中できちんとした位置づけをしていかなければいけません。ある意味では研究のものすごくオーソドックスな本質的な部分についてきちんと踏まえなければいけないと思うのです。先ほどレヴィ・ストロースの議論も出ましたが、我々はこういう希望の話、希望論の数々についてどう押さえていくのか、更にそこに先ほど出てきた能や茶道、イニシエーションの議論などをうまくつなぎ合わせていく必要がきっとあるのだろうと感じました。

メモの最後にある「必然的偶然」というのは何となく勢いで書いたようなところもありますけれど、6月18日のワークショップの前に仁田さんのセミナーがあつて、自分の中で「あっ、これだ、しゃべることができたぞ」という偶然のような必然的な感じがしました。この言葉は釜石調査の時に使った言葉ですが、経営学や組織論の中でも「必然的偶然」といった議論はあるそうです。上手くいった人はみんなたまたま運がよかったというけれど、たまたま運がよかったのは、本当はたまたまじゃなくてちゃんとそこには社会的背景があるということ調べる経営学だか組織論だかがあるそうで、そんなことも感じました。

最後にこの間、ある会社と希望学のメンバーでちょっとした懇親会をしまして、私が酔っ払って叫んだのがこの言葉らしいのです。「希望が希望として捉えられたと感じてしまった瞬間に希望学は終わる」(のかも)。希望について、一義的な定義とか、断定的な議論はしないことの大切さ、それが私の発作的発言の背景にあったのかもかもしれません。

以上です。二人の報告は時間通りにびちっと終わりましたが、内容については全然びちっていないので、一体どういう質問があるのか、誰がどう答えるのか全く想像も見当もつきませんが、よろしくお願いします。

宇野：ひとつだけ追加します。もう一枚レジュメを配りましたが、これは6月19日に配ったもので、その時は政治学者として、何故今の時代に希望が語られているのか、という現代において希望が語られる背景のような話をして、政治と希望はどのような関係にあるべきかについて触れました。これについてもお話しすべきだったかもしれませんが今日は特にこれについてはお話ししません。